

わたしのへタリナイ

OKAWA SHIORI

大川史織

1. かたみ

小雨の冷んやりとした朝だった。待ち合わせ時刻の午前九時、東京駅丸の内南口改札から勉強さんはネイビーのブルゾンに黒のパンツ、ボストンバッグひとつで軽やかに現れた。

「ああ、大川さん」。初めてお会いするのに、何度目かのようなご挨拶。メールの印象と変わらない。やわらかな声とリズムに緊張がすっとほぐれていく。

二〇一六年四月三日。東北より一カ月ほど早く、千鳥ヶ淵の桜はこの日満開を迎えていた。タクシーの後部座席から薄紅色の並木を眺める勉強さんの隣で、私は膝の上に載せたカメラ鞆を開ける瞬間は今日訪れるだろうかと考えていた。

（四月一週目の日曜日、東京へ行きます。靖国神社で開かれるマーシャル方面遺族会の慰霊祭

に参加しますので、その後に旅の打ち合わせをしましょう。よかったら、慰霊祭も一緒にご参加ください）

遺族会が毎春靖国で慰霊祭を行っていることを、私は勉強さんからお誘いを受けるまで知らなかった。参加は遺児でなくても構わないとのことだったが、一抹の不安と戸惑いを抱えながらタクシーを降り、大鳥居をくぐった。

遊就館前の参集殿入り口でゲスト札をもらい、二階へ上がる。戸襖の上に「神通誠玉」と書かれた広間が会場だった。マーシャルの海を彷彿とさせるターコイズブルーに白い南十字星が輝く会旗が正面に飾られている。

六〇人近い参加者は勉強さん世代の七、八〇代の遺児が大半を占め、私と同じ孫世代の姿もちらほら見えた。

マーシャル方面遺族会は「クエゼリン島戦没者遺族会」を前身とし、昭和三八年にクワジェリン環礁で「玉砕」した戦没者遺族を中心に結成された。皇族朝香宮鳩彦王の第二王子音羽正彦海軍大尉もクワジェリン島で亡くなっている。天皇皇后両陛下が二〇一五年夏にパラオをご訪問された際、マーシャル行きも希望されていたことを思い出す。ひとくりに戦没者といっても、マーシャル方面の戦没者は、一夜にして「玉砕」した島から、補給路を絶たれて敗戦までの約一年半「飢餓」の島と化した島まで、「戦死」の最期はさまざまだった。

「戦時下のウォッチェ環礁で、餓えて亡くなったお父上が書いた日記を形見に持つご子息がいる……」

マーシャルの首都マジュロで、安細和彦大使から信じがたい話を耳にしたのは、二〇一四年

の春だった。

日本から慰霊巡拝団がマーシャルを訪れるたび、安細大使は団員を出迎えた。慰霊祭で弔辞を読む遺児の多くは、父親と幼い頃に別れている。父親の享年をとうに超え、白髪まじりの遺児が「お父さん」と慰霊碑の前で亡き父に呼びかけ、手紙を読む間は、誰もが父と別れた時の年齢に戻る。その光景に立ち会う度、なんとも表現しがたいものを感じると安細大使はよくお話しされた。

その巡拝団の中に、ウォッチェで戦死したお父様の日記を持っているご子息がいたという。話を聞きながら、私は作家辺見じゅんが『私たちの大和』で「恋文」と題し収録していたある夫婦の話を思い起こしていた。敗戦の色濃くなった満洲で暮らす妻が、ある日慰問袋の中に高粱の種を一握り入れて夫の戦地に送ると、夫は種を蒔いた後に爆死。還らぬ人となった。が、夫が蒔いた高粱は敗戦まで飢えに苦しんだ兵士の命を救った。その夫の戦地が、マーシャル諸島のウォッチェ環礁だった。

北の満洲と南のウォッチェ。遠く離れた夫婦の心を幾度も送りあった手紙が繋いだこともさることながら、慰問袋に入れた高粱の種が珊瑚礁の島で実をつけ、飢えゆく兵士の命を繋いだ話には、人知を超える何かを感じた。

そのウォッチェ環礁で餓死した兵士の日記が、遺族のもとに戻ってきた……!?

文字通り「奇跡」だと思った。

翌年、二〇一五年八月。三年間のマーシャル生活を終えて帰国した私は、戦後七〇年を機にスタートしたウェブメディアの編集部で働きはじめ、マーシャルで青年海外協力隊員として日

本語教師をしていた友人森山史子さん（以下もーちゃん）に寄稿を依頼した。もーちゃんのエッセイは、長野県在住の女性が六〇歳から一五回、戦死したお兄さんの慰霊でマーシャルのミリ環礁へ訪れた話を紹介するものだった。

エッセイ公開後、編集部宛に一通のメッセージが届いた。

そこには、マーシャルのウォッチェ環礁で戦死されたお父様への想いが、溢れんばかりに綴られていた。

〈……もう一度、ウォッチェへ行きたいと思っています。その時は、ぜひ力を貸してください。佐藤勉〉

ウォッチェは、私もいつか必ず行ってみたい島のひとつだった。

早速、かつてウォッチェ島に滞在したことがあるもーちゃんを佐藤勉さんに紹介した。

日記を形見に持つご子息と勉さんが同一人物であると知ったのは、その後のことだった。

「佐藤さんと四月にウォッチェへ行くことにしたよ」

それから一年半後、二〇一六年二月。職場の上司から部署異動の話を受けたもーちゃんは、交換条件として勉さんのウォッチェ慰霊の旅を実現するための長期休暇を求め、見事承認を得た。

七五歳までにもう一度ウォッチェに行きたいと願う勉さんの願いを叶えられるのは、このタイミングしかないという判断と選択だった。

「行ってらっしゃい」と出掛かった言葉を、とっさに呑み込んだ。

ウォッチェで、撮りたいものがあつた。

そして勉さんの目的が果たされる旅になれば、映画になる。そう、直感していた。

「旅の記録を映像で撮らせてもらえないでしょうか」

意を決し、撮影者としての旅の同伴を申し出た。マーシャルのドキュメンタリー映画を撮りたいと思って、三年間マーシャルに住んでいたこと。今回の旅に同行させてもらうことで、作品が作れたらと思っていること。しかし、現時点で完成をお約束できないこと。身勝手極まりない依頼を、勉さんはふたつ返事で受けてくださった。

翌日に旅の出発を控えた勉さんの壮行会が、安細大使のご自宅で催された。

夕方、まだ明るいうちから勉さんのグラスはよく空いた。

「自分で限度わかってますから」と笑う勉さんが、アルコール持ち込みNGのウォッチェ島で一週間過ごせるだろうか。元氣そうな勉さんを見ると、心配の種はいつしか体調管理から断酒に変わっていた。

これまで三回、日本遺族会の慰霊ツアーに参加した勉さんがウォッチェに滞在できた時間は、わずか二〇分。島のどの辺りでお参りしたのか把握することも難しかった。

その姿を、お父さんが空から見ていたら――。

「父は怒っていると思うよ」

酔いがまわった頃、勉さんの口から予想もしなかった言葉が飛び出した。

私たちは首を横に振りながら「きっと喜んでいますよ」と口々に返した。

「……そっか……そう言ってくれて、ありがとう」

涙ぐむ勉さんは、うつむきながらそう言うと、話を続けた。

「いつだったか、飛行機の機体故障で、予定日の翌日にミリ環礁の上空まで行ったら、滑走路で草を燃やしていて結局空中参拝しかなかった三家族がいたのね。あれはかわいそうだった……」

今回の旅も、予定は未定だ。エアー・マーシャルは通称エアー・メイビー。離島ウォッチェに予定通りのスケジュールで往復できる確率は半分もない。

当日の天候、よく壊れる機体の調子、目的地や経由地の状況によって、上空まで飛んでも空中参拝しかできずに戻ってくることも十分考えられる。その不確実性を受け入れながら、最善の準備をして臨むしかなかった。

帰り支度に入ろうとした頃、勉さんはぽつりとまた言葉を零した。

「幽霊として出てくれば、一番いいのにね」

戦後七一年の歳月が経っていることを、一瞬忘れそうになった。その月日が一年だろうと、七一年であろうと、勉さんにとっては単なる数字の変化にすぎない。むしろ、哀しみは深まっているようにさえみえる。

せめて、幽霊となったお父さんに会いたい。そう切に願う勉さんの望みを、誰にも叶えることはできない。

その残酷さと無念さと思うとき、大日本帝国と称したあまりに広大な土地や海底に、未だ一一〇万余人の遺骨が眠っている事実を直視してこなかったところか、その範囲を実際より小さくしかそらで言えない自分の迂闊さを恥じた。